

紀伊半島大水害に伴う集落景観に配慮した 十津川村の災害復興公営住宅

十津川村役場、アルセッド建築研究所、環境設計研究所

●集落景観に配慮した一連の復興住宅の取り組み

日本一大きな村である十津川村。奈良県最南端で急峻な山々に囲まれた秘境の村は、2011年9月の「紀伊半島大水害（2011年台風12号豪雨災害）」からの復興に取り組んできた。

被災前から林業を核とした村づくりを目指していた十津川村は、復興公営住宅・被災者の自立再建住宅のモデルとなり、林業振興に貢献するための「十津川村復興モデル住宅」を建設した。

モデル住宅には、十津川の気候風土や景観、生活様式への配慮だけでなく、十津川杉の魅力を最大限引出し、省エネ、高性能、低コストであることが求められた。

設計者チームは、設計に先立って十津川の住まいづくりの所作を理解するために、民家調査、十津川大工とのワークショップ、住民ヒアリングを繰り返した。年間降水量が約2300mmときわめて多く、急斜面に沿って建てられる十津川の民家は独特の建築様式がある。また神道の家が多く、神棚や先祖の位牌を置く場所が重要視されるなど、多くの知見が得られた。

十数人の十津川大工と民家調査の写真を基に議論を重ね、例えば「山間地独特の風と雨から妻壁を保護し、かつ重要な景観要素であるスバルノフキオロシを継承する（右図No.15）」等のように、住まいづくりの所作を25項目に整理、共有した。また、省エネなど現代の住まいづくりに必要な新しい手法もこれに加えた。

これらの住まいづくりの原則に従って2棟のモデル住宅（平屋建て、二階建て）を建設した。その後、2014年4月までに、復興公営住宅13棟、医師住宅1棟が完成した。

●十津川の風景に溶け込む配置計画

平地の少ない十津川（森林率約96%）では、大規模な造成を行わず、集落に住宅を埋め込むことがふさわしい。村の安全・安心拠点である谷瀬・高森集落に集約された復興公営住宅は、既存の地形や樹木、生活動線である「里道」の継承を優先して、間口5間×奥行3間の細長い戸建て住宅を、等高線に沿って配置した。高低差の大きい敷地では、谷側を高基礎として高低差を建築的に解決する、この地方に多い建築様式「吉野建て」を採用している。

建物は雨掛かりを軽減するため軒を低く、深くする一方、室内に圧迫感がないよう屋根断熱・勾配天井とした。十津川民家の特徴である杉縦板張りとし、スバルノフキオロシを設け、擁壁には石積みを施し、風よけの板塀や生垣を廻すなど十津川らしい風景を継承した。

●十津川杉の活用と林業振興

十津川の人工林の材積は杉：桧＝7：3であり、今後は杉の活用が期待されている。10齢級程度（約50年生）の杉（胸高直径280mm程度）が豊富にあるため、間伐材からとれる最大寸法4寸×7寸を主要な梁・柱を4寸角とする構造計画とした。十津川杉の魅力を活かすため、内部は柱・梁を見せる真壁造りとし、大黒柱・差鴨居など民家的かつ骨太に材を用いた。

●村づくり戦略の中に組み込まれた復興公営住宅

十津川村では、関係各課を横断した「活力と魅力あふれる村づくり推進委員会」を立ち上げ、村づくりの戦略を検討しながら復興事業を推進した。今後の十津川村の安心安全拠点となることを目指し、復興事業を推進した谷瀬集落と高森集落では、現在「村の芯づくり事業」が継承されている。

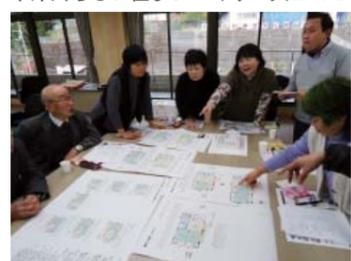
若者から高齢者まで働きたい、住みたいと思える集落を創ることを目的に、空き家利用や新たな福祉施設の構想、林業の六次産業化に由来する産業的なプロジェクトを含め、復興の次の段階の村づくりが進んでいる。



十津川村全図



十津川らしい住まいづくり 大工WS



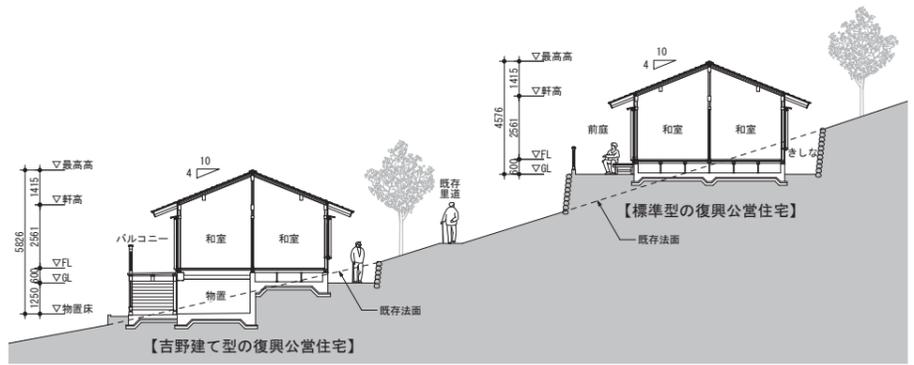
住民参加の検討プロセス



十津川大工による手づくりの住まい



十津川にふさわしい住まいづくり25の手法



斜面地を活かした復興公営住宅



集落に溶け込んだ復興公営住宅（谷瀬集落）



斜面地を活かした復興公営住宅（高森集落）



杉縦板張り、スバルノフキオロシ等の景観要素の継承（谷瀬集落）



石積み、板塀、生垣による十津川らしい風景（高森集落）



大黒柱、差鴨居など、十津川材を骨太に用いる（モデル住宅）



十津川材の魅力を活かす真壁造り（医師住宅）